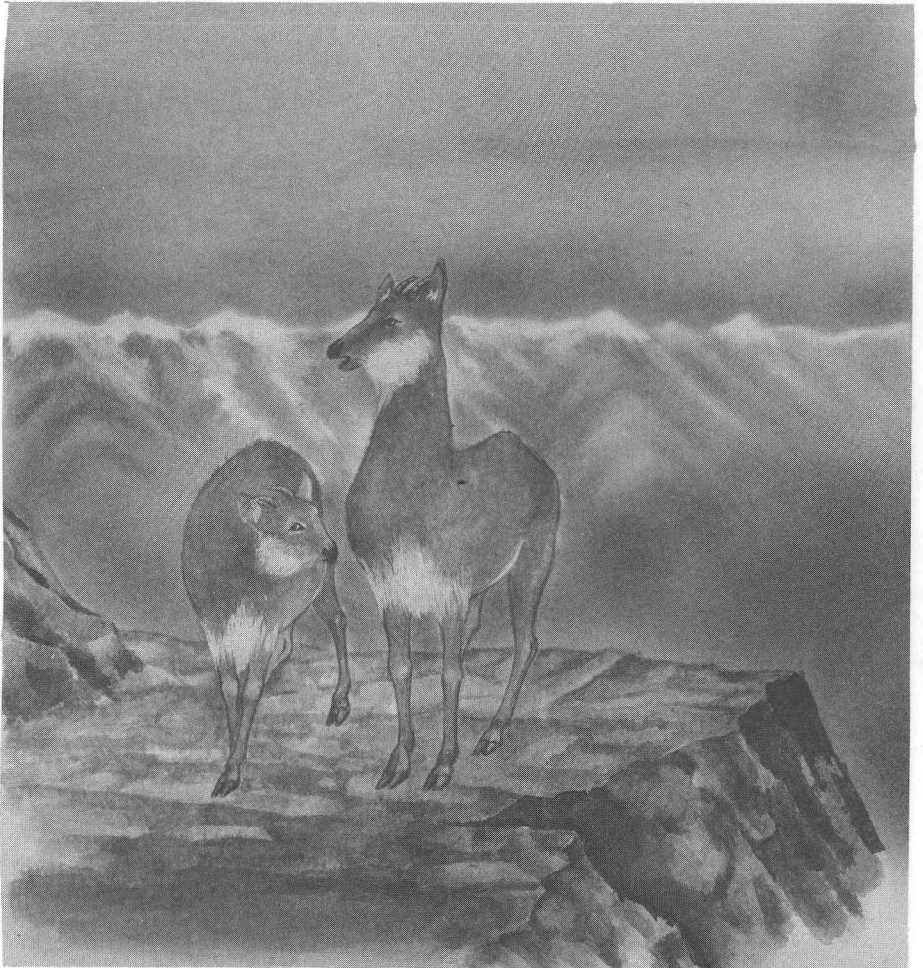


季刊 連句 第34号

平成三年九月一日発行



立機式について（南柏雑記 32）	1
新炭俵批評特集	
新しい酒は新しい革囊に	佐野 千遊… 2
三本目の道標	小林しげと… 4
新炭俵を読んで	宮下 太郎… 6
実にその通りなのである	村野 夏生… 8
新炭俵を拝見して	名古 則子… 10
木の丸殿より	中尾 青宵… 12

猫蓑同人会発会式と二十韻興行	14
二十韻六卷 捌	東 明雅・市野沢弘子・内田 麻子 副島久美子・中島 啓世・中田あかり

「蓑虫」付勝二十韻	16
-----------	----

第三十八回 猫蓑会	18
出版祝賀会の記	仏淵健悟
二十韻十卷 捌	山崎一恵・秋元正江・小林しげと・杉内徒司 穴沢篤子・下鉢清子・梅田利子・杉江杉亭 福井隆秀・雑賀 遊

芦丈翁俳諧聞書（Ⅱ）	22
二十韻 借景の花 両吟	式田和子・坂本孝子… 24
二十韻 モロッコの月 文音両吟	内田園生・中島啓世… 25
電通連句部 二十韻三卷 捌	青木秀樹・鈴木 茂・佐古英子… 26
卯の花連句会 二十韻三卷 両吟	仏淵健悟・峯田政志・若松隆一・ 近藤守男… 27
湘南連句教室 二十韻三卷 捌	蒲原志げ子・松田多恵子・ 本田八重子… 28
雁帛往来	29

立机式について

南 柏 雜 記 32

雅

俳諧（連句）の世界には、他にないいろいろな変わった慣例がある。立机式という事もその一つであろう。

立机式とは、連句辞典によれば「庵号などを襲名し、それを披露する興行。執筆の経験者などで、宗匠から独立を許された者が、その旨を披露する意味で設ける式のこと。

師から文台を授けられ、証書が授与されて、専門的職業人（業俳）として認められる」とある。これと似たような語に、「文台開」という語があり、これは、文台を授けられただけで、業俳としては認められないものをいうのである。

私は芦丈先生から文台はいただいたが、時代が時代であり、ことにそのころ先師は病がちであったので、正式な文台開きは行なっていない。もちろん立机式も行なっていない。

元々、私は庵号とか文台開きとか云うものには、何か江戸時代の家元制度の名残が感じられて、どうも体質に合わなかった。曾て、鎌倉の清水瓢左先生から、抱虚庵の庵号を譲りたいというお話があった。抱虚庵は先師芦丈先生が松永蝸堂から譲られた庵号で、私としては名譽の上もなのお話であったが、それを固辞したのも、一つには、私になじまなかったからである。

その後、昭和五十六年に私は朝日カルチャー・センターで連句講座を開くことになり、もう今年で十年になるが、その間ずっと続けて私の授業を聞いた方も何人かある。私の講座を三年間聞いた方には先師譲りの蕉風伊勢派の伝道書をお渡しすることになっているが、十年続けて聞いて、結構、人を教えることの出来ると思えられる方々については、私は今度文台を授与し、立机式をしてさし上げたいと考えている。

昔流の庵号授与が家元制の余臭があるのに対して、私の考えているのは、ただ単なる名譽としての文台開、乃至立机である。第一、私は譲るべき庵号を持ち合わせていない人からは、南柏庵とか、ねこみの庵とか言われ、私も世を忍ぶ仮りの名として気に入っているが、人様にさし上げるような庵号ではない。

他門では、たとえば新庄の北陽社では、今年六月、五人の宗匠の立机式が盛大に挙行され、立派な記念の刷物が配られた。

猫蓑派では初めての行事であるから、勝手が分からぬところが多いが、北陽社の方々の好意で、その作法を教えてください。また、都心連句会での例、あるいは一山一海宗匠の書などを参考にして、無事に今年の十二月に行事をとり行いたいと思っている。これについて猫蓑の皆さんにはおめたい話なので御協力をお願いする次第である。

新炭俵批評特集

新しい酒は新しい革囊に

—『新炭俵』を読んで—佐野千遊

『新炭俵』は連句作品として、歌仙二巻、二十韻二十四巻を収め、上巻には八新連句「二十韻」の提唱Vなる一文、巻尾には八二十韻早わかりカードVが付録されている。

著者東明雅氏のあとがきにある通り、この著作が芭蕉最晩年の俳諧撰集『炭俵』に因んで、「軽み」の境地を目標にしていることは言うまでもないが、その主軸が氏の考案になる新形式二十韻の提唱とその作品の披瀝にあることは明白であり、新しい酒を新しい革囊に盛ろうとする著者の熱意がよく伝わってくる。

新形式二十韻はその提唱文によると、歌仙形式の美点を撰取しながら、現代の生活実態を勘案して一巻二十句に短縮した懐紙形式で、式目その他も歌仙に準じて興行されるとする。昭和六十年三月の「季刊連句」に公表されてから約六年を経過して、この形式も既に定着したと言えよう。

歌仙形式に準じながら二十句で満尾する形としては、「二十韻」は考えぬかれた形式だと思ひ、私も若干試作したことがあり、今後機会を得れば巻いてみたいと思っている。

ただ私一個の感想として、一巻二十句のうち「月二句」が少し煩わしく思われぬでもない。

言うまでもなく、太陽曆が採用される明治五年まで、人々は月の運行、満ち欠けによって曆を繰っていた。従って月は日常生活や年中行事に密着した存在で、月への関心も到底今日の比ではない。そのことは詩歌文芸の世界にも投影しない筈はなく、月は花とともに賞美、尊重の対象とされてきた。百韻における「四花七月」、歌仙における「二花三月」の式目も、この辺の事情がもとで制定されたものではなからうか。

それはさておき、『新炭俵』の巻頭に掲げる二十韻「春ノ月」の巻は、さすが手練れの連衆の仕だけあって、見事な三吟である。

春ノ月や木の間は余吾の水明り

帰りに鴨に睡る鳩鳥

蕨餅落着きの茶をすすめぬて

葵艸

時彦

明雅

の亡り出しには、極上の煎茶を喫するほどの香気が漂う。

裏に入つて

炬燵の中で直す時差ボケ

深雪晴れ槍投げの槍突きささる

若き男の背筋まっすぐ

の付けと軋じは面白い。「時差ボケ」に「槍投げの槍が突きささる」諧謔（時針と槍との連想もはたらく）、突きささる槍に「背筋まっすぐ」は「若き男」も利いて映りであり、響きである。右に続く

尼となり果ても甘き恋の味

鍵穴にただ蛇の衣ゆれ

も、「鍵穴」「蛇」が象徴的に活かされて、微妙な恋の渡りとなった。名残の折に入り

植木屋の日当騰るばかりにて

赤門前の餃子チューハイ

の軽妙さ、名残の裏

玻璃戸のあなた皆菜種梅雨

きしみゆく柩車に花の散りかかり

老人一人田の畦を塗る

の納めようも余情豊かである。

一卷興行の過程をまとめた式田氏の記録へ「春ノ月」の出来るまでVは、簡潔にして要を得、臨場感が程よく盛りだくんで、貴重な資料であるし、読み物としても楽しい。

残念ながらその他の作品に触れる紙幅がないが、上巻所載の八連句の復活とその将来Vと題する東氏の一文には注目しておきたい。

雅

艸

彦

雅

艸

渡

彦

雅

艸

彦

雅

「連句は今日奇蹟的に復活した」と書き起し、その復活

の理由を挙げ、折角蘇った連句を出来る限り広く長く「国民の多くに親しまれる文芸として存在して欲しい」と願ひ、その為には徒らに形式や式目を固定する事の危険性を強調し、「……よい作品・すばらしい作品は、どんな形式でも、どんな式目を使っても存在しうるだろう。このように言う」と、形式も式目もどんなにしてもかまわないと言っているように聞こえるだろう。実はその通りなのである。せっかく連句を復活させたからには、それを時代や社会に適合するように、第一、自分に気に入るように新しく変化させて行くべきである。」と断じた上で、「しかし、いくら変化させ変貌させても、連句という文芸であるからには、それにふさわしい本質だけは絶対に失ってはならない」と説き、連句の本質を「付句は前句にのみついて、打越の句とは縁がない。このような関係を繰り返して一巻の作品が創り出される」そのメカニズムにあるとする。それは即ち相隣る二句の付けと、三句の渡りの変化のことに他ならないと私は理解した。

この連句の本質さえ失わなければ、「その一巻がどのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも私はそれを連句と認めようと思う」と結ばれている。

卓越したこの所論は『新炭俵』に漲る斬新性を象徴するとともに、これによって、氏の連句に対する見識の高さと、並々ならぬ愛情を窺い知ることが出来る。

三 本 目 の 道 標

— 『新炭俵』をめぐって —

小 林 し げ と

一、真・草・行

○平成三年二月十五日『新炭俵』成る。

右の一行は、もし先生の年譜がいつか作成されるならば重要な事項となる筈である。この第三連句集は『夏の日』（昭47）、『猫蓑』（昭57）につづく先生の俳諧史上、一つのエポックを画すからである。故にこれは昭和36年秋、根津芦丈翁を師に仰ぐ30年来の最近の先生の成果として位置付けて読みたい。

信大を退官された先生は、昭和55年松本から柏に転居された。そこでその俳諧活動をかりに信州時代と柏時代とに区分する。前期は信大研究室で芦丈翁御自身の三十棒を賜った時期、翁歿後数人の学内関係者や知人との、または東京都心連句会との接触、それから作品集『夏の日』、七部集諸注大成・付合の基礎的研究により科学研究賞補助金の交付を受け、さらに『連句入門』（昭53）、『芭蕉の恋句』（昭54）を次々に出された、いわば書道の真草行の真に当る時代。草と行に相当する後期は東京ACCへの出講（昭56）、『俳諧無言抄・鰻刻と解説』（昭57）、猫蓑会の発足（昭57）、『猫蓑』、『季刊連句』創刊（昭58）、『連句辞典』（昭61）、その他各地での実作指導、諸誌への寄稿等、研究と実践に多忙であった、もとよりこれにはまだ未知の最晩年期

を含むのだが。ともあれ、先生の後半生はかように俳諧の一路を突き抜けてこられたわけである。先生は「道統（伊勢派芦丈翁の血脈のこと）を継ぐ」と云う。この目的は蕉風を正しく伝える先師の遺訓を継承し、明治以降著しく衰退した俳諧のために余生を捧げたいとする一念の貫徹であった。『新炭俵』は一冊の本として読み堪えのある集であると同時に先生の強固な意志を具現する業績の延長線上に新しみを加えたものでもあった。

二、二十韻

『新炭俵』は『炭俵』に倣い上一冊本。作品と文章をのせるのは前の作品集と同じ。作品は二十韻24巻、歌仙2巻、文章5篇から成り、従前と異なるのは二十韻の収録が圧倒的に多く、しかも巻頭を占め、この形式に対する意欲を示す。二十韻の試みは、もはや実験段階を過ぎ、少くともグループ内では定着し、一般への公表を憚っていない。これは『季刊連句』第3号所収、草間時彦氏の「一日がかり」連句に就ての断章・三」の所感に共鳴し、実作時間の経済化、季題配置、定座の設定、懐紙折目等の検討を重ねたすえの形式である。（cfカード「二十韻季題配置表・例」等）本集の「二十韻の提唱」は『季刊連句』第8号（昭60）の再掲で、同誌には先生捌のモデル作「師走の町」を併載、

以降毎号会員による二十韻を発表した。同じく対吟「青しぐれ」（文音）は同誌第11号の第二回武翁賞受賞作。いま連句形式は多様であって、二十韻もそのなかの一つだが、その作品を大多数にまとめて世に問うたという点に『新炭俵』編集面の工夫と特徴を認める。亀戸天神社藤まつりと深川芭蕉記念館の法楽二十韻18巻は奉納・追善の際、所定の作法により厳修される。だからといって作品も別に肩肘張った内容ではない。ただ儀式の奥床しい雰囲気は伝わってくる。伝統的儀式を尚ぶ精神のややもすれば軽視されがちなとき、法楽の古式をグループ活動の柱に据えることは、先人の文化遺産を見直す上で大きな意味があり、時代錯誤とはいえない。「道統を継ぐ」という先生にすれば、極めて常識的なことにすぎない。

三、新しみを追う

『冬の日』（二六八四）と『炭俵』（二六九四）の連衆が少しづつ変わったように『新炭俵』でも少しづつ入れ替った。この連衆交替にやはり歳月の推移を感じとる。芭蕉はつねに旧染を改めた一では、先生はどうか。この場合、初期の俳諧（『夏の日』の一部、『朴の花』―昭45―に関する限り）まだ一句独自の表現はあっても作品一巻のなかに先生固有の世界は明瞭に見えてこない。『夏の日』の言葉借りるならば「昭和連句へ」の時期（昭42〜46）は、翁の歿後、形式（歌仙）を端然と把握するための探究を虚心に続けておられるようだからである。純正連句確立への里程である。『猫蓑』前後の時期は大成期である。『夏の日』後期の作

品群と『猫蓑』との十年の懸隔は、先生の目指した「昭和連句」の達成に見事な役割を果たした。『国文学』解釈と教材の研究』の座談会「連句の愉しさ」（昭52）で発言の控え目だった先生はその直後の『連句入門』、『芭蕉の恋句』で連句の作法と鑑賞の仕方を詳述された。これを実証した『猫蓑』所収作品は、著者と直接これらの著述に啓蒙された世代との共同の結晶ではあるまいか。選ばれた連衆の交替は、作風の新しみと決して無関係ではありえないと思う。

四、余 裕

従来、先生は基本形式としての歌仙または半歌仙を固守された。「二十韻の提唱」後は歌仙か二十韻かを適宜撰択される。二十韻については、上述の実作時間の短縮もさることながら、連句に対する馴染み易さとも関連があろう。本式としての百韻が略式の歌仙に流行した原因は、その形式を元禄期に完成した芭蕉の明敏によるが、他方その形式に親しみを覚えるほどの要素のあったことにも因る。昭和・平成の二十韻といえども怪庭はない。

(1) 春ン月や木の間は余吾の水明り
 蓼艸 帰りし鴨に睡る鳩鳥 時彦

(2) 蕨餅落ち着きの茶をすすめりて
 明雅 若き男の背筋まつすぐ 彦

尼となり果てても甘き恋の味
 雅 鍵穴にただ蛇の衣ゆれ 艸

『新炭俵』巻頭の「春ン月」表三句と裏の恋の渡り、手練の三吟である。(1)の格調、(2)の円転自在な付運びの妙を

味わう。この作品首尾までの座談記事も洒脱である。所収作品はすべて形式をマスターし、三句転・付味・構成・題材等過不足がない。とりわけ恋句をみると、淡々とした情調の恋、ギリギリの線で表現された危うい恋等、折によって仕分ける巧みさに興味を誘われる。一卷全体的変化も行届いている。「私の連句採点法」は、いかにも教育者らしい筆法で連句水準の規矩を提示、説得的である。要するに先生は師表の衣鉢を守り、己を責め新風を拓く姿勢を崩さない、その道程で三本目の道標を樹てられた。「新炭俵」と『夏の日』は確かに違う、が『猫蓑』と余り違わないよ

新炭俵を讀んで

で

うに思える、もし違ふとすれば、新しみを求める中に前よりもずつと余裕のある点を指摘したい。この余裕を指して軽みと云ってはどうか。志を同じくした連衆と微笑を分かち合う先生の横顔が彷彿する。そういう座の作品は読者もらかな気持で鑑賞ができる。「先師の変風における：冬の日」はさるミのおほはれ、さるミのは炭俵に破られたり：「という去来のような総括は、しばらく後世の評家に委ねるとして、『新炭俵』は現在あるべき俳諧の典型的な一位相を明示している。改めていう―この集は「面白かった」と。(東明雅・新炭俵・角川書店・二〇〇〇円)

宮下太郎

連句というものに二十代から縁があっても随分長く続けてきたものである。昭和四十年代初め頃はあまり実作のための適当な本とてなく、寺田寅彦の連句エッセイや能勢朝次の『連句芸術の性格』あるいは幸田露伴の七部集注釈へこれは巨大な本で故朝倉文夫先生の書齋で讀んだVなどが印象に残っている。俳句は生前の朝倉先生に教えていただけへ晩年の内弟子だったVその後は波柿系の小笠原樹々先生に俳句と連句を教わった。

小笠原先生は当時『連句というもの』を出版されたり連句連盟なるものをつくられて『連句』という雑誌まで一時

出されたがうまく時流にのることは出来なかった。連句のスライド制作を頼まれ野村喜舟、野口里井、樹々の三吟、へ松過ぎやVの巻を三十六コマのスライドにしたことなど懐かしい。世田谷池の上八幡様での連句会は伴野溪水先生ほかも交え楽しい雰囲気、これがのちの市ヶ谷連句会となるのだが、たしか第一回俳諧時雨忌を青山だったか、新宿の厚生年金だったかへ参加しようかどうか迷ったことなどをおぼえている。

その後、阿片瓢郎先生の『連句研究』に参加したりあれこれ連句を自分なりに楽しんでたが、ほとんど他の連句

グループとの交流はなかった。たまたま山地春眠子氏と出会いは杏花村Vの前身、市ヶ谷南方子邸での東京義仲寺連句会へ誘われここで多くの連句人を知った。これが実に楽しい連句の座で、今考えればただ懐かしいばかりでなく大いに教えられるところがあった。

いつの連句の座だったか、ここで出合ったのが東明雅先生の『夏の日』であった。今までの連句の本とは全く違う魅力ある内容で驚いたことを覚えているが丁度昭和五十年の初頭頃ではなかったかと思う。手元の『連句辞典』を見ると四十七年の出版とあり、まだまだ連句ブームには遠い頃にあたる。五十三年から四、五年の間に連句関係の本が続々と出版され、引き続き連句懇話会の結成に至り、今まで古いと思われる連句がかえって今日的なものとして見直されるようになった。山地氏の『現代連句入門』や近松寿子さんの『連句をさぐる』など、東先生の『連句入門』とともになつかしいが、これがもう十年以上も前になるから時の経過は恐ろしいものである。

さて東先生はその後、猫藪会を結成され連句集『猫藪』の出版となるが、この後いづれは炭俵のもじりの集を出されるのではとひそかに思ってもいた。とすれば最初の『夏の日』の時にそうした思いがあったということにもなり極めて興味深いことに違いない。

ところで今回の『新炭俵』の出版は夏の日から二十年に近い。一読軽みの味を感じたが、あとがきにもあるようにその体裁はほぼ元禄の炭俵に近く上下二巻にわかれている。

連句作品は二十韻が多く、これが△新軽みVの味付けになっているのかも知れないが私にはむしろ文章の方が印象に残り、また参考になる。連句集といえばただ連句だけがずらりと並んでいると、第三者としては読む△或いは見るVという行為が一寸つらいものとなる。その点新炭俵の場合は連句、文章ないまぜの適度さがあり特に△新連句二十韻の提唱V△私の連句採点法Vなどはわかりやすい。二十韻を主とした連句作品も総じて平明かつ銜いがない。平明さは大切なことで、実作における無理なき付けはこびがうかがえるとも言えようか。

二十韻は適度の長さでいわば準歌仙ともいうべき形式だがいい名前がないものだろうか。二時間程度で巻きあげるにはたしかに歌仙では無理で仕方なく半歌仙でお茶をにごしている場合が多い。私は以前二十四句△えびら、胡蝶Vやソネットなども一応は試みたがまだ二十韻はやったことはなく、この際は是非いちど試みてみたいものである。

連句の来し方を考え、連句の今後を考える適切な文章も△連句の復活とその将来Vにおいて端的に言い表わされていると思う。いろいろの考え方があってしかるべきだが押しつけは困るというのも同感である。私は連句は出来るだけ楽しくやりたいと思っているディレクターとしての立場でこの『新炭俵』を読んだつもりである。そして全体として△新軽みVの味が出ているように思う。元禄の昔と平成の今、芭蕉没後三百年はすぐそこである。

実にその通りなのである

村野夏生

明雅先生。

「新炭俵」読ませて頂きました。素晴しさにその一部をコピーして（ご了承も得ず）海賊版を作り、連衆に配ったりました。改めてお許しを頂けたら、と思います。

論がいいです。

特に『連句の復活とその将来』（独険肯定の）一カ所だけ疑問はありますが、これは現代の連句論の中で最も優れたもののひとつではないかと思われます。明快であり、論理的であり、連句の本質をついて余すところがありません。

連句の本質とは何かという。この本質さえ失わなければ、よい作品、すばらしい作品は、どんな形式でも、どんな式目を使っても存在しうるだろう。——とこう書いて、その後だ。「このように言う」と形式も式目もどんなにしてもかまわないと言っているように聞こえるだろう」そして平然と言いつつ。「実はその通りなのである」。

ここが面白いではないですか。そうではない——といつてくれると思っていた文脈がひっくり返って、世の形式論者、式目信奉者たちのアツと口をおさえる様子が目に見えるようです。

実にその通りなのである。

私の、古いノートから。

ウラ折立

仮縫の立体裁断秋の吐息

王女の恋は馬上三尺

クルスする骨と髑髏の胸じるし

ちよっと行つて

粘土版文書を解けば借金証

クサヤの干物ボンボンと囁む

なんてのもありました。

歌仙『草矢飛ぶ』。明雅捌です。昭和四十八年七月七日

首尾 於浅間温泉深山荘とあります。私がわだとしおを名

乗っていた頃、玄一郎さんも牛耳先生もまだまだお元気で

した。あの頃は連句を巻くひとりひとりが悩み、苦しみ、

燃えていた時代でした。技術や経歴をいうのではない。時

代全体が新しい連句を求める初心に燃えていたようでした。

その初心に通う緊張感を持った文章、汗牛充棟ヤクタイ

もない凡百の連句書を蹴つとばす文章がこの『連句の復活

とその将来』でありました。

ところで、いやそれ故に『春ノ月』の出来るまで』は

或は私の感性の守備範囲の外のものであります。ここにあ

る、サロンの雰囲気、挨拶に満ちみちたやりとり、高手危

地に遊ぶといった座は、もちろん連句発生以来の衣裳とも

いふべき風景であります。どうもその底には、付けによ

る一句の変容という、連句の基本的な力学が余り働いてい

玄一郎

としお

牛耳

徒司

としお

ないんじゃないかと、共同制作の底に蠢く、激しい個の対立また唱和の精神がもっとも感じられて欲しい、とこんな風に思うのはおそらく私ひとりでありましようが、この書がこれからの俳諧壇の将来を左右する大事な一投と思いますので言わせて頂きました。

ウーン、この間、白い帆を張った子どもたちのための方舟のような幼稚園を見に行ってきました。風が遊ぶ幼稚園。

風はこの家に手をかさなかつたのか？
でも、少しだけさわってみました。

その痕跡がここにある。えぐられた曲線は風のいたずらにちがいない。だが、少年の眼をしたヒゲの建築家は説明をしない。

——あれは風の口づけ、とだけ言って、はにかむような微笑を浮かべるだけ。

そんな文章が書いたらナァと思います。

●
それにしても『新炭俵』。

「夏の日だろ。猫蓑だろ。ぼくらの意表を衝くナンテ素晴らしい批評精神だろうと讃嘆したもんだね。柔らかで、謙譲とその裏の自負とのないませの巧みさ。が、この度はズイーとおとなしい」

「炭俵は俳なり、というんだ。現代、俳なりは何かね？」

「石炭袋だノ」

「ストレートだね。おれならダンボール。これが俳じゃ

ないスカ？」

「ウーン」

「ぼくは、東急ハンズ。日常性の中に詩をノ」

「ハハハハ……」

「バカだね。もじりが面白いからってまたその真似をしたって手柄にゃならないだよ。連句じゃ三句目の転じが大事だっというだろ。夏の日、猫蓑ときてその後もじるのはシロートさ。ウラのウラってワケ。これが連句」

「フン。したり顔してナニさ。句でも、したり顔の句がよくあるだろ。いまの連句ダイキライ」

●
終宵尼の持病を押えける／こんにやくばかりのこる名月。また、桐の木高く月さゆる也／門しめてだまって寝たる面白さ。空豆の花さきにけり麦の縁／昼の水鶏のはしる溝川。秋の空尾上の杉に離れたり／おかれて一羽海わたる鷹。そして、上おきの干葉刻もうはの空／馬に出ぬ日は内で恋する。幼年、連句初学のころ、先達に教えられた名・付け合の数々。みな炭俵。もっとも「その悪いところに居びたれて貰ふと甚だ有難くない」と露伴はいつてます。所謂俗連句、商売連句、力の入らない、ウソの多い、ただこと連句の悪い流は慥にこの炭俵に根ざす——とも書いています。作品一つ一つに触れる余裕がなくなりましたが、連衆に露伴の一語を贈って、蕪文のゞと致しやしょう。

「蕉翁も高所より下りて方便をもて撰取不捨の慈願を築しまんとする如きさま見えて……」

新炭俵を拝見して

名古則子

大分前のことになるが、私は師匠清水瓢左の使で、明雅先生にお会いしたことがある。使の内容は、「抱虚庵」襲号をお引受頂けないだろうかということであった。「抱虚庵」とは明雅先生の師匠根津芦丈翁の庵号で、芦丈翁の跡を清水瓢左が継いでいたものである。瓢左高齡に及び、生存中に襲号を了えておきたいとの意向で、明雅先生にお願いをしたのである。結果的にはお引受頂けなかったのだが、この時の明雅先生は日頃の温厚な先生に似ず、断固とした決意を示された。今時のことだから、一時代前の、庵主と弟子の關係、又師匠の風交關係を含むテリトリーの繼承の意味は存在しないが、それにまつわる観念的なものはないわけではない。この時明雅先生が考えていられたものは、所謂「宗匠」としてではなく、もっと開かれた連句環境作りであったのではないかと拝察し、引下がったのである。

その後も着々と仕事を積み重ねられたのだと思うが、その証しともいふべきことは、「新炭俵」の連衆の層の厚みの見事さである。二十六巻すべてが、同等の高いレベルで巻かれており、連衆が粒よりなのである。先生が長い時間をかけて、連衆に、連句に対する見識を、じんわりと浸透させて来られたという感じがする。俳諧という字の持つ意味、「ゆとり」を連衆の皆さんが持っていられるように思われる。自分が見え、相手が見え、万象が見えるという「ゆとり」がなければ連句の座は持たない。この「ゆとり」は、洒脱に通じ、洒脱は、日本文化の美意識の大切なものの一つである。

「ゆとり」に關係のあることだが、「新炭俵」の作品は、一巻の流れが見事だと思ふ。

各々の句のモチーフは極めて日常的なことだし、一見さりげなく進展しているようだが、句と句の間の緊張はしっかりと読者に伝わる。近年数多くの作品が発表されるようになったが、それらの中には、各々の句が、完全に孤立して、我も我もとひしめき合って、さながら俳句の展示会のようなものがある。又ずらりと自の句が、五句も六句もつつ立ち並んで、身動きとれずの巻もある。

「新炭俵」の作品は、ああも言い、こうも言いして、実に楽しげなのである。極端な言い方かもしれないが、連句は作っている時の流れを楽しめばよい。人に見せるために作っているのではないのである。作品を事後的に鑑賞するのは余録である。先頃この点を、連句の閉鎖性と指摘された学者があった。連句には一般の文学作品のように、心の昂ぶりを与えるようなものがない。しかし、それでよいではないか。連句とはそういうものである。とまあこう言ってしまったのは、芭蕉の言葉の敷衍しをしているように興醒めだが、以上の理由から、鑑賞に値する連句作品というのであれば、創作過程での連衆の息吹が、ひたひたと伝わり、丁々発止と交わされた緊張感が現われていなければならぬのである。「新炭俵」では、それがよく表現されて居り、殊に、大根引きの巻の中に多いように思われる。

こうした自在な流れを作る理由は幾つかあるが、その一つとして考えられることは、各々の句の主題部と副題部、又は主語と述語との言葉の取合せが、二句間の付のように、不即不離の關係で成り立っている句が多いことである。このことは句の内容を大きく膨ませ、付方、付味を容易にしているように思う。

もう一つは、遣句上手の連衆が多いことである。しかるべきところで、まことに適切な遣句が出ている。恐らく、他の連衆は、この時、膝をたたいて喜んだに違いない。それが、読む者に伝わって来る。遣句が投込まれることで、一巻の流れが息を吹き返したように転換するのが各所に見

られる。

最後に、話し言葉そのままの導入について書いておき度い。「若先生こんなところでこまります」「風呂飯褒ると言ってみたいよ」「悪ぶっている彼が好きなの」等々。ざっと数えて二十。おふざけ、お猿、お手伝さん等々、おの字をつけたもの、十三。これと同時に、口語体も可成の量である。かれこれ十年前前、連句懇話会で座談会があり、連句に於ける口語体の使用について論じられたことがあった。大方は、口語体を使うと、句の語調がしまらなくなるのではないかという感触だった。今日そのように考える人は少ないだろう。芭蕉は、弟子に普断の言葉を使えと言っていたことが、弟子の書簡の中で録されている。芭蕉は、話し言葉を使うことによって、その時代に生きる人間の生活を捉えることが出来ることを、今想像する以上に感じていたに違いない。今の若い世代—文語の感触を知らない世代—が連句を作るようになった時、話し言葉の会話そのものがずらりと並んで、自然描写の句も口語になって、思いもかけない省略の手法が出来るようになる、連句も、新しい作法や式目を考案することになるかも知れない。

言葉は、生きものである。しかしどう表現されようと、連句の独特な文芸の形式は残したいものである。

とりとめない批評で、貴重な紙面を汚したことをお詫びして、筆をおくことゝする。

木の丸殿より

中尾青宵

朝倉や木の丸殿に我がをれば

名告りをしつゝゆくは誰が子ぞ

これは新古今集収録の天智天皇の御製である。朝倉の宮に泊る朝、宿直の者が名告りながら門を開けさせ通り帰るその姿や声の颯爽たることに、いぶかしさと羨やましさを覚えた、素朴に詠まれたのである。天皇がまだ皇子であった頃の作といわれる。大らかな詠みぶりに風格があるが、皇子として政事をしつゝ、国の地位者は当然いろいろな悩み事や計り事等で常日頃頭がいっぱいであったことだろう。その或る朝、余りに銜いなく名乗りつゝ、行く若者に新鮮な驚きを感じられたわけである。

二十韻という新しい形式を工夫されて、実績を積み重ねられ、遂に商業出版まで漕ぎつかれた快挙に、先ず賛辞を呈し上げる。これはひとえに主宰の情熱と連衆の研鑽の賜物であろう。これが成功あって版を重ねられるとすれば、その大事な二つのことは勿論、短形式そのものの現代性ということであろうか。

俳諧は文台下せば反古といふ、又夏炉冬扇の類いと謙遜

しつゝ、芭蕉も弟子達を編者に仕立て、矢継早に俳諧の諸集を刊行した。しかもそれが当時の俳諧世間のみならず、三百年もの間、読み解かれ読み続がれし、今日に到つても天上の星の如く、俳徒のみならず凡そ文学に心を寄せる者に感銘を与えているのである。しかしその原動力は何といつても芭蕉自身の並々ならぬ俳諧への情熱であつたと考える。

そして新しい板行毎に風は変わり、それを世に問うた。世に問うと云つても、それは自信の裏打されたものであることは云わずもがなのことである。先の宿居の者の名告の姿や声に新鮮さと羨望を皇子とて感じたのも、その言動の基にある自信の表出から掻き起されたものなのであろう。

其角は

俳諧の集つくる事、古今にわたりにて、此道のおもて起すべき時なれや

と、これは「猿蓑」の序に詠い上げている。元禄の頃、それは今日の出版事情と異り、遥かに困難であつたが、五十年間に五百冊程の俳書が刊行されたという。それでも俳諧の集をつくる事は此道のおもてを起すべきものとの気概で

なくてはならぬと云い、将しく七部集の随一ともいふべき集を世に問うた。それは和歌連歌に匹敵するに足る自信を示したものであるが、今日ではそうした前提は不要であり俳諧そのものの興の中心として読まれるのである。その風姿風情は、時雨のさびを基に心をつ佳吟に満ちているが既にしていわゆる軽みの傾向も胚胎し、奥の細道の苦行を経て流行の概念と軽みを得、「炭俵」に到った。この軽みの思想は向後三百年、殊に今日の俳界の全てを象徴的に示唆しているといえよう。すなわち軽みは自ずから以後の時代の基幹として好まれたもの、俳諧は月並に陥り、発句のみ俳句として軽みを救いとして隆昌した。近時連句の復興が漸く明らかになりつゝあるが、それは様々な苦惱の果の俳諧者一同の努力と工夫が開かしたものであろう。

伝統俳諧を尊重しつゝ、如何に現代に意義ある俳諧を在らしめるか。俗談平明は今日では特別に意を配さなくともよいとして、新形式を工夫することや、安易な風雅を避ける工夫と努力をすることには十分意を用いねばなるまい。軽みと軽薄とは異なることを忘れてはならぬことも、元禄の頃より更に今日の問題ではある。

「新炭俵」は前の問題に一つの解決を示された。後の問題についても何ら危惧することなき佳吟が散りばめられたのには敬服の至りである。そしていろいろの考えの果に、今日の俳諧が「炭俵」の先に在るべきとの信念が「新炭俵」と命名されたものであろう。

凡そ芸道には極みはなく、常に形式と内容はせめぎ合い

規制し合うものだが、本集は新形式にいても易々とハドルを越えられたかとも見まがう程である。それが読み作る者に優しいのは、新形式によりながら古き伝統の枠を外さないというオーソドックスな方法であるからであらう。古来多くの形式があるが、短形式の改革には二道あると思われる。一つは「新炭俵」の方法であり、最大限の古き式目を容れ込んで踏み止まることであるが、二つは更なる急進にて習つて来たものの大部分を切り捨て、全く新機軸を打ち出すもの、例えば極度の短形式とか、月花も捨て四季を配らず表の挨拶も嫌忌もなく、初折表と名残裏の句数一致のないもの等々。一方伝統の形式の中で新しみを追求する道もまたまだ閉ざされたわけではないとすれば、本集を境に、今後統々と其角の「おもてを改める」板行が、様々な結社から様々な主張がなされるのではないかとの予感を覚えるのである。

とまれ「むめがゝに」の巻の挙句で芭蕉は
屏風の陰にみゆるくわし益

と新風の出来を恥じらう如くして自信をのぞかせたが、今その屏風を取り外し、隣近所に三国一の嫁取をしたとご紹介なされた。まことその嫁は美女貞女にして、益に盛られたのは美味なる菓子と見受けられる。

そしてそれは又

未進の高のはてぬ算用

から抜け出られた挙句でもある。

本集を手にし、荒削りの木の丸殿にあって未だ寝呆け眼をこすりつゝ、祝意を申し述べるものである。

猫蓑同人会発会式と二十韻興行

猫蓑同人会がいよいよ発足し、今後の活動が期待される。

平成三年六月三十日
於 浜離宮恩賜庭園

泉 殿 東

明雅 捌

青葉風

市野沢弘子 捌

夏の鴉

内田 麻子 捌

泉殿四方に光る池の波

梅雨の晴間のかぐはしき風

無伴奏混声合唱高らかに

積木くづしてあそぶ子供ら

ゑひてそるあさきゆめみし月の暈

浮気の虫も鈴虫も鳴く

踊の輪おかめの面はわが夫

外湯へ通ふゆるき宿下駄

猫ぢやにやも名古屋だにやもそつだなも

中気の薬利いたことなし

神の留守雲も飛びゆく形して

すっぱん鍋の窓に見る月

丁半をなりはひにして四十路越ゆ

魔性の肌のしっとり付き

僧院に抜け穴ありてマリア様

鴉群かり裏山に住み

姨捨の里に住みつゝき幾年か

新入生の孫も訪れ

花の奥誘はれゆく袖袂

天啓のごと金色の虻

青葉風一筋の道見えてをり

梅雨の晴間に散策の人

鉄瓶の蓋をずらせる静寂にて

貰ひし菓子猫を猫に分けやる

独立のテレックス来し窓に月

秋ぞ隔たる街の令嬢

窮屈な恋を鷗外雁渡る

ベイエリアにはベカ舟もなし

短冊へ病名そつと告げてをり

常にくさめの出るやうな顔

鱈の卵に酒を酌むが好き

山門くぐり尼も友達

若ぶつて無料のパスはご遠慮す

キスは身体に良いと言ふ説

月浴びて真夏の夢と姪らせ

しらじら明けにごみの選別

長崎のクルスの墓標傾きて

稼ぎて送る里の山葵田

花ぐもりお浜御殿に案内乞ひ

東踊りのつけの決まりぬ

弘子

和子

正江

好敏

和

江

和

江

敏

和

江

和

敏

弘

和

敏

弘

敏

江

敏

老松の枝差し伸べて夏の鴉

池のほとりに咲ける河骨

オープンで焼き上げしパン匂ふらん

児等賑やかに駆けてくる声

皓々と富士五合目を照らす月

秋のカーテン閉ざす新婚

中波に遂だいたんなねだりごと

世界地図描く藍の大皿

住職の耳順の衣ゆるめにて

どことなく似る父と息子と

かまど猫何でも見てる片隅で

月寒き夜をひとり放浪

シヨパン弾く女の横顔一途なる

のっぴきならぬ仲はそれから

憎しみの菓人形に釘を打ち

不意に鳴り出すポケットのベル

揺れに揺れ証券会社ドン交替

高層の街去りて陽炎

手品師の口上囲む花の下

栄螺蛤箆にいっぱい

麻子

美保

清子

哲

良子

麻

哲

良

清

保

清

保

清

保

清

保

清

良

保

哲

うれしさや

副島久美子 捌

うれしさや同人集ふ夏座敷

久美子

池のほとりに生る蜻蛉

淑子

自転車で貰はるる猫見送りて

遊

靴履き替へて軽くジョギング

瑞枝

はじかみのほのくれなゐに月が射し

遊

七夕飾る姉おとなさび

枝

新涼のワープロで打つラブレター

淑

ハンガリーよりワイン届きぬ

遊

共和国独立願望ままならず

淑

あたり気つかひ煙草いっぶく

同

大袈裟な支度で鮒を釣りに行く

遊

月の峠に寒行の影

枝

炉の婆にのっぺらぼうの話聞き

遊

都会暮しの息子DINKS

枝

トリプルで回転ベッド・泡の風呂

淑

嘴太鴉ごみに群がり

枝

抽出しにしまひ忘れて頭痛薬

遊

ショッピングカート春風の中

久

パレットに花の散り込む写生会

淑

ほろとくづれし若布お握り

枝

浜昼顔

中島 啓世 捌

名園や浜昼顔の揺れ揃ふ

啓世

夏燕舞ふ汐入の池

郁子

村芝居仕草もはでに見得切つて

徒司

煙管につめる洋モクの粉

一恵

月のぼる背の兒たちまち眠りたる

達子

ファックスでくる文のうそ寒

郁

稲刈もみようみまねのタイの妻

恵

拍子とりつつ声のよろしき

達

梯子酒財布の軽きこと忘れ

司

ベンツ・フォードを野に捨ててあり

郁

冬ざるる河原に光るものは何

司

ちり鍋かこむ窓に月差し

恵

わが家も灰燼とせし火砕流

司

赤く燃え立つ猫のひとみよ

恵

年甲斐もなく嫁想ふ横恋慕

郁

焦れば吃る愛の告白

司

巣鴨なる癌切り不動願かけて

達

柵にもたれる風車賣り

恵

花の雲登山電車のみえかくれ

達

家包に提げ諸子佃煮

郁

潮入

中田あかり 捌

潮入の岸边に青葉若葉かな

あかり

築山あたり蟬生る頃

雅代

家族連れ外人画家も描くらむ

隆秀

パイプくゆらし先づは衣服

よしえ

特急車窓ひろやかに弦の月

代

膝と膝とが触れしうそ寒

秀

小鱈鮨貴方の箸で食べさせて

代

ベッドでひとり言語リハビリ

え

泥棒のあとに野良猫二・三匹

秀

証券界に起る激震

代

スクラムを押し押せ我等ラガーたち

り

襦袢市行けば月は中天

え

書記官の辞令貰ひし紐育

秀

モンローちゃんにちよつと似たる子

同

信頼のポデューガードは鬼となり

え

鳩の飛び立つ寺の大屋根

代

古稀となりまだ兵隊の夢をみる

秀

ぶらんこの子が吹ける口笛

代

微醺して連衆と花賞でにけり

秀

春の絵日傘畳みおさめぬ

え

付勝練習二十韻

蓑虫

東明雅

切日 締20 旬月 投10

十五句目
十六句目
十七句目

治定 やあ、いよつ、はてな名前が出てこない 達子

- 1 になにくのせいかこの頃医者離れ
- 2 浜木綿の花咲き続き海昏し
- 3 多々弁じ年金暮らしまた弁ず
- 4 暑氣中り漸く癒ゆる昨日今日
- 5 暑中御見舞ポストに落ちる音
- 6 関帝祭呵呵と笑ふは婆あ殿
- 7 手花火に興ずる子供二三人
- 8 夏ばての脳の時計の止りをり
- 9 空蟬のつきし小枝を児が呉るる
- 10 橋渡り踏切り涉り投函す
- 11 十葉の匂ひのしるきこのあたり
- 12 下戸なれど妻に頼まれ缶ビール

ゴミ袋つつく不気味な鳥たち 妙子
ちよいとそこまですててこの月 あかり

※元気でいられるので、有難いと思っております」とお八ガキにあって、「多々弁じ」の意味がこれで分かった。④は①と同じ病体だが、表現が暗くて重い。⑤これもおもしろいが人情無しであろう。⑥関帝祭は三国志の雄関羽を祭る南京町のお祭りである。珍しい祭りを取り上げ、表現も奇抜である。前句の軽さに対し、ちよつと重すぎはしないだろうか。打越の無気味さと通うものもあるようだ。⑦手花火は花火とともに晩夏の季語になっているが、徳川時代は花火は秋の季語であり、かつ、秋の正花となっていた。しかし、現代では違和感があるので、花火を夏の正花にしようという説が出て、私もそれに賛成である。しかし、手花火までを正花にしてよいか否かには疑問があるので敬遠したい。この句を取ればいろいろとあとが面倒であるので敬遠したい。⑧④と同じく何か暗い。⑨空蟬は鳥と異生類の打越である。二十韻では異生類の打越は嫌う。⑩何か「ゴミ袋：」の句からの三句が、一続きの景に見える。もすこし転じが欲しい。⑪これも⑩と全く同じ三句続きであり、しかも花の句の前に十葉など植物を出すのはまずい。⑫これは一転している。しかし、考えてみると、すててこをはいて出て行ったのは、妻に頼まれ缶ビール買いに行く為だということになる、さきに結果が出て、あとにその原因が述べられることになる。このような付けは一卷の進行を阻むので嫌われるのである。このように言えば、⑬も⑭もこの傾向が見られる。⑮この句は花の句の前に植物、しかも凌霄花と花の字の付く句を出した上に、人情もない。また、

- 13 門口で妻訪ふ女に慌てけり
 14 車庫なくて夢の新車を買ひそこね
 15 凌霄花のぼたぼた落ちて道もせに
 16 戻り道祭囃子に気が変り
 17 夜は夜で溽暑の室のたへがたし
 18 豆飯のふるさとの味配りをり
 19 土用東風吹いて涼しき浦通り
 20 たどたととテント張る児等みちゃをれず
 21 夕風に追はるる如く家を出る
 22 聞え来る二階囃の賑やかさ
 23 河童忌の田端に住みて幾年ぞ

- ①この句を投ぜられた由川慶子さんのおハガキに「十句目に八すこし疲れてVがあるのが気になります。まずいでしょうか。それによくみると八据ゑ膳Vもあります」とあった。蒜を食べば八疲れが取れるVからの気配りであろうが、それは考えすぎである。蒜と疲れとは直接の関係はないし、しかも六句も隔っている。また八据ゑ膳Vだって三句隔っているのであるから、問題はない。この句は今まで出ていなかった病体の句であるが、むしろ明かるくて、その点、打越の句からも完全に転じ得ている。前句にもよく付いていて軽く、よい付味でもある。この句を治定してもよいと思った。②この句は人情無し、これはまずいし、次の次は句いの花であるのに、浜木綿の花を出すのは困る。③「町内、商店会やいろいろ雑用多く、もっともそれで※

「ゴミ袋……」の句から三句続きとなっている。⑩この句は神祇を出して来たところ⑥と同じだが、比較してみると⑥の方が転じが利いていておもしろい。⑰この句はすててこをはいて外に出た原因を述べている。もしこの中の一字をかえて、「夜は夜で溽暑のころのたえがたし」とすれば、外を歩いて行く時の感想となり、非難を免れることになるだろう。⑱この句はすててこと豆飯の位付けがよく、軽いよい句である。⑲この句も何か「ゴミ袋……」の句から三句、同一の場面続きとも取れ、かつ、人情がうすい。⑳一方ではすててこで歩く人、他方はテントを張っている児童たち、これは自の句に他の句を向いあわせに付けた付け方、前句によく付いて転じもあるが、テントは天幕と片仮名の打越を避けるべきであろう。㉑これも何か原因・結果を述べているようだ。㉒二階囃は祇園会の囃。これは付味も転じもよい。㉓七月二十四日は芥川龍之介の忌日。田端も龍之介ゆかりの土地である。これは自ら述懐となっているが、河童と鳥は異生類の打越となるかどうか。

さて、治定的一句「やあ、いよう、はてな名前が出て来ない」は、実に軽妙な句であり、人間生活の機微をうがっている。深刻に考えれば、名前が急にうかばなくなつたのは惚けのせいだろうし、そう言えば述懐の句ともとれるが、半分会話体を利用して、軽く、明るく、付味も転じも抜群である。達子さんの句は二度目だが、うまいから仕様がなしい。次は花前の句。春季で軽く、人情なら他の句を付けること。

第三十八回 猫 蓑 会

二十韻十卷

参加者五十二名

平成三年七月十七日
於 深川芭蕉記念館

出版祝賀会の記

佛 淵 健 悟

夏の句座 山崎一恵 捌

前日まで空模様心配された第38回猫蓑会は、打って変わった梅雨晴となった。江東区芭蕉庵に於いてこの日、東明雅先生の、「新炭俵」、及び猫蓑会の「猫蓑作品集I」の出版を祝う会が持たれた。関東はもとより、岐阜、豊田、遠くは下関からと、各地より五十二名の方々がかけつけて下さり盛況であった。

女性陣から、お祝いや花束をお受けになる明雅先生はやや落着かなさそうにしておられたが、御挨拶の中で、「夏の日」、「猫蓑」の各連句集に続く今回の「新炭俵」では特に、御提唱の二十韻形式の充実を示すことができたことについて、関係する全ての方々への御礼の言葉を頂いた。

又、「猫蓑作品集I」の発行に尽力して頂いた「八の会」の方々への慰勞があり、席上提案により、次回作品集の編集等お世話頂くことが決まる。

引き続きの連句興行は、十卓に分れての二十韻。満尾までの二時間半、お楽しみ飲食もあり、会場は終始和氣藹々とした雰囲気であった。明雅先生はこの日はお席は持たず、各席一句ずつお付けになって回られた。

進行係のすすめるマイクによって、それぞれのお席より心あたたまる祝辞を頂戴する中、筑波大学の加藤慶二先生から、連句の道を歩まれる明雅先生のお姿に、「漠とした予感が現実になっていく喜び」が述べられた。

各席満尾された作品は、それぞれ捌きによって披露がなされたが、名句珍句に湧き笑いの絶えない猫蓑会の日であった。

最後に明雅先生より、この冬、秋元正江氏、式田和子氏、杉江杉亭氏へ文台を贈られる旨の御発表があり、目出度くこの日の会を終了した。

師の本の上梓祝ふや夏の句座

梅雨の明けたる緑深々

錦鯉池悠々と泳ぎのて

靄ならして走る下校児

ピッコロでパロックを吹く望の月

人待ち顔を見せぬやや寒

駆け落ちの落ち着く先の忍草

ペーカー街にホームズの家

亡霊は鎧兜に鎖まで

強いお酒をぐっとひと息

夢^オ買ったつもりの籤が大当り

冠鷲の愛らしき声

月影をあびつらガーは訪れぬ

まるで媚薬の様なく・ち・づ・け

捨てられて忘れられても燃え続く

礼拝堂に隠る黒猫

故郷へ送る湯島のかりんとう

風光る昼バス停に佇つ

万古須臾花の散り込む石舞台

彌生の山に豊かなる野辺

一恵 千町 明雅 淑子 啓世 健悟 町子 同子 町子 悟子 悟子 世町 世町 世町 世町 世町

〔新炭俵〕上梓を祝して

深川や

秋元正江 捌

深川やむかし水鶏のはしる溝
 地下鉄出でて拾ふ片陰
 宇宙より眺めし地球輝きて
 手を休めずにテレビ見る主婦
 掛軸は父の好みし誠の文字
 梶の蹴鞠をきそふ仲とか
 何処より宿りし命夜の露
 ユングフラウの峰に立つ月
 サミットのオンザバーにゴルパチョフ
 眼鏡をはづし遠く見てゐる
 神の座を舟虫が這ふ海開き
 モーターバイク唸る国道
 スペードのカードで定める彼・彼女
 酒池肉林は夢の暖炉で
 凍月の青々として中空に
 回診の医師つづく沈黙
 心の臓移し植ゑたるひとの近く
 若布ふりかけ届きたるまま
 花前線日本列島半ばなり
 砂丘はるかに陽炎の子ら

正江 明雅 K 久美子 正敬 達子 K 敬 久 敬 K 久 敬 K

百合匂ふ

小林しげと 捌

〔新炭俵〕「二重虹作品集」の上梓を祝ひて

ゆかしさやこの俳諧の百合匂ふ
 万巻曝しいつも豊饒
 宵々に斗洒なほ辞せぬ習ひにて
 するする昇るピルの望月
 秋場所の四股踏む力士頼もしく
 袖かき合はせ待てばうそ寒
 ダイエットどころか恋に瘠せほそり
 カリストの熊空にさまよふ
 原子炉に普賢文珠の名を冠せ
 門を南に決めし占
 のど飴をなめて少しは楽になる
 部長の好きな落語俗曲
 ビッグベン長針動き月凍し
 社会鍋にも貧のいっ灯
 ひつめの髪を愛しと羽交ひじめ
 その気にさせしあとの混浴
 生き字引と言はれ税が上らない
 入学式の大きめな服
 花吹雪回転木馬ゆるやかに
 湖を見渡す囁りの山

しげと みづゑ 明雅 美津 同 津

二重虹

杉内徒司 捌

〔新炭俵〕上梓に集ふ二重虹
 久闊を叙し噉る夏蕎麦
 子供らの遊ぶ砂場に仔犬きて
 ふと身構へる蟪蛄の斧
 月の出を待って名酒の盃をあけ
 萩散る庭をひとりさまよふ
 逡巡は齡の違ひと脊の高さ
 母の反対効かぬ駈け落ち
 噂には根あり根も葉もなきはデマ
 深雪の寺に弥陀を守りつ
 山怒る麓の民に凍つる月
 恋しき人の吾は嫂
 出の衣裳晒に秘めしBカップ
 水増し請求させて寝たがる
 のっけから切った張ったの懺悔録
 パブルはじけて蟹も穴掘る
 南欧へ旅の仕度のサングラス
 合乗りぶらんこ漕ぎて転校
 薄紅合みて花の散らんとす
 膝を正して聞きし囁り

徒司 孝子 壽子 千雪 明雅 みどり 孝 雪 司 孝 壽 同 孝 同 壽 同 孝 同 壽 孝 雪 壽 孝 壽 壽

油蟬

穴澤篤子 捌

涼風や

下鉢清子 捌

夏雲

梅田利子 捌

捨水のはじく埃や油蟬

ボタン外してクレープのシャツ

ふりむけば高炉の煙ひとすぢに

山の端目指す鳥の羽撃き

月画きゐて色のちぐはぐ個性的

ひよんの実吹いて未だ少年

残り香の妻とはちがふ秋扇

週刊新潮売れゆきのよき

証券界裏の癒着のあばかれて

猫を相手に過ごす毎日

あつめてもあつめても散る落葉掻き

有明ひびく寒取の声

石仏を求めて巡るツーリング

強壯剤を分けて飲み合ひ

性なれどこの身のほてり持て余し

鍵作ります買物の間に

佐久よりの鯉の甘煮を賜りぬ

春まで置きし濁酒酌む

五分三分一分ちらはら花だより

でこぼこの道陽炎の中

祝「新炭俵」

涼風や俳諧いよ厚うせり

うれしく集ふ窓の葉桜

あやとりの小さき指に借られるて

鍵盤踏んで猫のドレミファ

のっと出て坂東太郎照らす月

新米を炊きめをと箸置く

四畳半温め酒にはろほると

ファジーな奴がもてるこの頃

病得てすぐに宰相はづさるる

趣味の陶芸商売となり

お神楽もろくろつ首もある境内

半月懸かる雪吊の松

スペインのピカソ見ようと電話婆

黒い衣裳は男惹くのよ

はぢらひて化粧落とすに惚れ直し

ずらりと並ぶ突堤の海猫

故郷を捨てたつもりが忘れかね

嬰兒と漕ぐぶらんこの揺れ

夢てふ字床に飾られ花の宴

飴煮の鮎の形よき皿

清子

冬乃

ふみ

文字

光子

み

明雅

清

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

夏雲や大川渡る橋いくつ

上梓寿ぎ生れ出でし蟬

連弾の姉妹の息もよく合ひて

休憩時間つまむキャンデー

終電の駅のホームに仰ぐ月

一葉どこかに消えし梶の葉

牧閉ざすまでの同棲妊りぬ

修那羅の神の告げのまにまに

サミットに土産持つ人持たぬ人

マトリユーシユカの陳列の棚

氷下釣り風除け立てて黙々と

酒の菜には寒芹の鍋

山峡の猿も入り来る露天風呂

團扇で月をかくす口付け

もうあかんどないなつてもかまへんわ

教えを見事守る若後家

廃校の庭を餌場に鶏舎組む

老に放せぬ春の手袋

頂のひょうたん桜花万葉

浮かれくり出す東踊りに

利子

よしえ

好敏

澄子

シズ

敏

同

明雅

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

梅雨の明け

杉江杉亭 捌

青鳶

福井隆秀 捌

上梓祝ぐ

雜賀 遊 捌

新刊の頁を繰るや梅雨の明け

玻璃戸近くにゆるる青桐

下校時の子供等の声はずみ居て

ジュース一気に飲みほされたる

昼の月ゆっくり過ぎる飛行船

踊の振りをつけられし仲

鬼灯を鳴らして待つ東屋に

名物弁当すでに売切れ

親しげに島原見舞ふ両陛下

二世力士が土俵賑はず

へべれけに酔っぱらひたる雪女

のっぺらぼうが笑ふ凍月

宰相の椅子とりゲームファジイめき

「ひとめぼれ」てふ銘柄米買ふ

ふところいつも媚薬をしのばせて

心のヒューズ恋にショートし

黒猫の金の目光る長ソファー

巣造りはげむ戸袋の中

祝宴の喜寿のめでたさ花霞

げんげ田に寝て思ふ故郷

青鳶に風の渡るや上梓成る

白絣着て集ふ人々

由緒ある和菓子あれこれ選ぶらん

いつものコース犬のお散歩

福儀積みし新地に月の影

秋狂言に想ふ男の名

しのぶ恋宅配便で菊枕

リスボンの街果ては海とぞ

ともどもにアラアの神を伏し拝み

「悪魔の詩」をしげしげと読む

大変は天から樹から夢中から

寒月の下開く笹竹

熱燭に思ひ思ひの国訃

ヘア論争で苦笑チャタレイ

会長も二枚目さんも振られ役

起承転結の部を生き

このところ日和統きて雲もなく

ふらここ揺する姉に妹

宝物隠して遊ぶ花の庭

美しき枝には親と子雀

隆秀

啓子

富美

碧

志紅

志げ子

碧

碧

明雅

げ

啓

同

同

紅

秀

碧

碧

美

同

同

青畳涼しき句座や上梓祝ぐ

早生水蜜の盛らる塗鉢

長距離のトラック便のゆき交ひて

犬ところどころじゃれてゐる子等

月もよし潮の奏でる曲を聞く

野菊むしって来るのこないの

ロザリオ祭ヴェールをはねて軽キス

僵僕男の早鐘を撞き

島原の熔岩塊の次々に

老の釣果に集ふ炬話

年越しの蕎麦粉丸めて金集め

銀行員の愛想良きこと

ローレックス・ピアス・リングにペンダント

あっしいくんをいつも引連れ

夏瘦せは恋か嫉妬か赫き月

ブームに乗りし葉膳の店

砂浴びる雀を飽かず眺めをり

通勤二時間山笑ふ町

般若湯「爛漫」酌みて花の寺

空高々とすがる飛立つ

遊

良子

和子

淳子

道子

淳

和

良

道

良

和

道

淳

良

和

道

遊

淳

明雅

良

芦丈翁俳諧聞書(Ⅱ)

N (承前) それから何だだ。上州の高崎に加部琴堂という人があってね。琴の堂というだ。これもかなりの学者で、高崎一の財産家でね——横浜の開港時分に何をしたかしらんけんど、相場で損をしたてわけだね——けっこう何も無いような貧乏になっちゃまって、それから上田へ行って借家を借りて、そこでまあ連句をやったり俳句をやったりして晩年はね、伊藤松宇さんは加部琴堂に連句をね、五・六巻教わったという話だ。二十時分にね。

それで秋香老がお伴をして、かつみ老が琴堂の家へ行ってね——両吟をしている。秋香老はかつみとの両吟をもっていて、それから付ける。そしたところが、前句を「耻かしと思ふ心が恋やらん」というかつみの句で、それにま秋香老がつけるけど、持つて行きやまずつかない。つかない。朝からつけてるけど、一句も付かない。それから炬燵にあたっていた所が、炬燵掛けの裏がねカナキンのうらだちうで、随分まあ、琴堂老はね、高崎一番の身上もちの人が、み

すばらしい暮らしをしていたわけだ。それから、そのマア、「炬燵蒲団の裏はカナキン」と付けてもって行った。そしたら、ンちうわけで、「カナキンならどうした」とこう言った。ハテ、カナキンがいけねえなと思って、それからまた炬燵へ来て考えて、「炬燵蒲団の裏はつきはぎ」として持つて行ったら、「ウン。よろしい」と言ったというけどね。その秋香老が苦心談にまあその話をするが、その付けはね、明治時代の付けた。それは明治の大家の付けた。「耻かしと思ふ心が恋やらん」「炬燵蒲団の裏はつきはぎ」と、

H ちょっと心付ですな

N つぎはぎだから耻かしいというようですね。そういう、ま、全部というじゃねえが、明治時代の大家というような衆は、大方の人が、ま、そんな風だね。それでそのかつみ老とわしがね。上田の上村館という宿屋で落ちあつて、あの両吟したことがあつたけどね、その時、儂は三十四、三十四だ。かつみ老は八十七でね。八十七だけど眼鏡もかけないでね、達者な人で、それからマア始めたところが、秋のこんでね、ちと寒い、寢床の中でやりてえちうわけで、そ

れから隣座敷だもんだで、真中の唐紙を明けて、それから両方の寢床から頭出してね、そしてまあ、硯真中においてから、わしが付けるよね、筆を取ると、こうやって見るだね、で付いていると、それでいいと、それから頭あげてみて、付いていねえと、またこうやって、枕をつける。ハア、また筆を取る音がすると、またこう。

H ハッハッハ——

N そうして何しろねえ、夜中ごろまでにねえ——エーなんだ、あと一五・六句というところまではこんで、それから老人枕つけて軒をかくもんだで、それでマやめて、それからあと文通でやったがね——ア、そういう、まあ、そのさつそくな隠居でね——儂や他門との連句というものをそういう人になぶかっただ。はじめて、

H ハーハー

N その連句はこういう連句で、——「秋なれやまづ一日の夕あかり」と、うん、これを月としていただいて、それからしてね——「まだ日もおかぬ白萩の庭」そうするど老人ね——「せせなぎにあひるがのけば鴨おりて」とその他に「試みる酒にいつもの友よんで」と、もう一つあったけどそれ

は忘れたが、どうもそのせせなぎの句が丈高いもんだで、先生こりゃ欲しいけれど鴨はただ鴨としくと冬季だね。じき直して文句も言わずに「降りた鴨尾越の群や誘ふらん」と、尾越の鴨にすれば秋だもんだでね。それから儂がそれにね、「ここな渡しは稀な乗合」と付けて、老人が「どの家も覗いてみれば昼寝どき」それから儂がね「蠅の染汁わるくさきなり」と付けて、そんな表でね、出来て、相当なしっかりした巻だけどね——エそんなのはまあ、それへは載せなんだけどね——その旧派の連句が載っていると、新しい方面の衆がいやがるでね。ウーン、ウーン、ウーン、

それで伊藤松宇さんの連句が今度載るけどね。まことにおぞい連句だ。相手も悪いけどね。何しろその「にひはり」という雑誌を経営していたけれど、そのまあ組の人と連句をやるけど、制約の研究ばかりしてね、あの本にはこうあった、この本にはどうあったと言つて、まあその何だだ、何だから何だという、物から物へ飛んで行くような連句でね、儂どもはそれで傍観していただきますわ。その傍観している時分に川村黄雨という人があつてね。これはまあ、何

の森猿男だの、森じゃねえ、猿男だの
H ハア、ホトトギス一派ですな。

N そういう連中の仲間の衆だ。新派の本当のはじめにやつた子規たちとね。やつた衆で、それが貴族院の書記官を一生やつた人だかね。それで森山鳳羽先生が勅選議員で貴族院の生字引ちう人だ。これがいい連句の人でね、この人になつてゐるからして、やっぱり川村さんも傍観して笑つていた方で、それから、その当時、その仲間に鶴沢四丁というね、あつてね、四丁さんはその仲間になつてやつていたけど、どうも本当じゃねえと思うもんだで、儂にマ、いろいろ聞いて来るし、それから両吟やつたり、三吟やつたりしてね、「俳諧」という連句専門の雑誌を四丁さんはじめて、それから何だだ、余程四丁さんじゃ教えたり、仲間こしらえてやつたりしたけどね、どうも四丁さんの連句も妙な癖があつて、いい連句にやとうとうなりつこなしおしめえになつたがね。ウーン。

そこで四丁さんのこせえたあれは「俳諧辞典」というじゃなく辞典のようなかなり厚い本こしらえて出版したのを、まあ、あれはどこから出したか儂は買ひもしなかつ

たけどね、そのしまいへね、儂と竹邨氏(中村竹邨)とやつた両吟を一卷とね、伊豆の長岡の温泉で、他石さん(贅川他石)が捌きをした「にひはり」連衆のね、その巻と二巻載せてあるだ。それで儂はね、何の、子規が明治二十六年頃、その新聞の「日本」でね、旧派ひっぱたいてね、いる最中に儂ら旧派の凌冬(馬場凌冬)という人になつて、旧派のへエその先生が日本一いいと思つて習つてゐる時にまあ、旧派ひっぱたくだね。くそみそに、今に旧派のえらい人になたかれるぞと思つていたが、たたく人は一人も出つこなしで、子規の一人舞台で、新派おこしちまつて、その時にその新派の本当のはじめちうものは松宇さんの「椎の友」という方が先へ、それへその会へ子規もよっぽど通つてゐるすだ。そのあげくが、その旧派を叩いたのになつて、それで何しろ子規のひっぱたいたやつがいましましなくてはならねえような気持がついてまわるもんだで、松宇さんの何だだ、「にひはり」という雑誌仲間になつて、ところが、松宇先生はだんだん何だだ古くなつちまつてね。

(続)

*昭和三十六年刊「この一路」

二十韻 借景の花

両吟

借景の花もてなさん老の庵

蕨餅盛る七宝の皿

春袷紋のすが繡仕上りて

前売券はすでに売切れ

門の月静かにとまるオーブンカー

コロンに混じる体臭が好き

詫びて済むことではないとなじる妻

揚げれば増えてんぶらの種

布施薄く僧の読経の早仕舞

杉の北山雪しまくなり

狐火の誘ひにつる酒の酔

英語にもある訛いろいろ

囚はれていつか親しき部隊長

影うそ寒く待たす愛妾

彫りものの蜘蛛が血を恋ふ銀の月

抗生物質秋の風邪にも

灌漑の草にかくれて急ぐ水

手拭たもではしゃぐ子供等

夕ざくら操る木偶の首かしげ

まじろみ浅き菓籠りの鳥

平成三年四月十一日

於 式田邸

和子
孝子

銀の月と手拭たも

和 猫襲作品集を孝子さんがとりにいら

っしゃるとのこと。超多忙の方に何かおも

てなしを……。これっきゃないのが二十韻。

お茶菓子代りの起句を用意しました。

孝 私も帰りを急ぐ身、それなら一刻も

早く早く。時間は約一時間半あります。

発句 借景の花でもてなす老の庵 を、

こうしたらいかがです？

借景の花もてなさん老の庵

和 なるほど、勉強しました。

孝 第三「春袷紋のすが繡」は美しくう

っとり。そして、初裏の恋から釈教・天象

と転じた辺り、トントンと運びました。

和 7 詫びて済むことではないとなじ

られて

孝 はっきり誰がなじるのか出したほう

がいいと思うよ。

和 ほんと。私はなじったりしなかった

けど、そうだ、妻とするわ。これで光景が

鮮明になったわ。ありがと。

孝 私は日頃の欲求不満のせいか搦むよ

うな句の連発で恐縮です。それにしても海

千山千の二人が寄って素秋をやるとは大笑

い。それは、

14 影うそ寒く待たす愛妾

15 彫りものの蜘蛛が血を恋ふ秋の風邪

16 サンドウキツチに蛙をはさんで

和 孝子さん、月がない！ 月を入れて

孝 彫りものの蜘蛛が血を恋ふ銀の月

彫りものの蜘蛛が血を恋ふ十三夜

和 「銀の月」なら月岡芳年の世界だか

ら、16は「月」の字を避けて本名で「大蘇

芳年版画復刻」。「十三夜」なら下町風だか

ら彫勇会彫宇のさんで「抗生物質秋の風邪

にも」とつけるわ、お好みのほうに。

孝 銀の月で抗生物質をいただきます。

絶妙の付となりました。

和 孝子さんのお時間を気にしながら、

時間いっぱい一気呵成に巻き上げたせいか、

緊迫感がありましたね。孝子さんが「銀の

月」でかかってくれば、私は煮しめた「手

拭たも」で受けるという面白さを存分に楽

しんだ一巻でした。

孝 本当に充実した一時間半、有難うご

ざいました。ウン。これに味をしめて――

和孝 またネ!!

式田 和子
坂本 孝子

文音二十韻 モロッコの月 両吟

モロッコの月まどろみの果にあり 内田園生

蘭の壺には絵の如き文字

中島啓世

濁り酒独り酌む影誰ならん

しんみりとくき甘きセロの音

自転車ですぎゆくギャルの腰の線

手もふれざりし初恋の頃

赤彦の旧居なつかし信濃路は

釜飯屋には黒山の人

片陰を拾ひて孫の顔を見に

尺蠖虫は忙しきかな オホ

ティポットアラディンランプの形して

トランプ占ひ飽かぬ老女よ

心なく別れし君の今いづこ

雪降る中を思ひ出の宿

燃えつきし安らぎ照らす月冴えて

猫は大きなあくびして去る オホ

ジョギングは氏神の池一周し

見失ひたり空の雲雀を

古代より堀兼のあと花吹雪

春惜しむ人丘に佇む

生

世

生

世

生

世

生

世

生

世

生

世

生

同

世

生

世

生

世

楽しい文音

中島啓世

数年前、山口誓子先生と、モロッコにま
いります時、直前までその大使でいらっ
しゃいました内田園生様にいろいろ現地の
事をお教えいただきました御縁で後に、ヴ
ァチカン大使でいらした頃も御句集「モロ
ッコの月」をいただきましたり、セザンヌ
からブラックアフリカまで御造詣の深い、
美術のこともお教え頂き、時には東京の誓
子句会に御出席されました間に、御句集の
題名になりました「モロッコの月」を立句
にして、明雅先生御発案の二十韻を文音で、
ということになりました。

内田様は俳句は五十年以上のつわ者でい
らっしゃいますが、連句はお始めてなので
どうなることかと思っておりました所、明
雅先生の連句辞典も御精読なさり、こちら
がタジタジするような御質問も出される程
でございます。殆ど昭和に近い大正生れの
園生様と大正はごく始めの私とでは、恋句
なども感覚がずれて、初裏の恋はおと
なしく、と昔の事を思い出しまして「白線
二本の」で旧制高校の初恋をつけました所
送り返されました。それは全国唯一の白線

三本の三高から東大へと進まれたからでし
た。この作品といたしましては、表の四句
が四句がらみで、三句目の転じが利いてお
りませぬのが始めからわかっておりますた
が、いつも真面目に四、五句も出して下さ
いますのに、文音では始めての方にあまり
くどくどと申しにくく、つい一寸がまんし
てしまいました。十句目の尺蠖虫が面白い
ので字引をみておりましたら別名「土びん
落し」とあり、ティポットをつけました。
名残の表も終る頃になって、それ四つ脚が
ない、水辺が神祇が、スポーツ、鳥、山と
大あわてで、出し合いました。

とは申しながら、約一年がかりで出来上
りますと、とてもうれしく、連句の良さ、
楽しさをしみじみと感ずることが出来まし
た。

平成元年からは、国際俳句交流協会会長
となられ世界的に御活躍、殊に「フランス
語の俳句」の御出版、セネガル、モロッコ、
イタリーでの俳句会への貢献は、内田様以
外の誰にも不可能、益々の御活躍を期待致
しております。

行く春 青木秀樹 捌

ゆく春やしきりに動く旅ごころ

鯛網にわく瀬戸の島々

八朔の甘き香りが満ち満ちて

居間に流れる曲はツエルニ

焼酎の酔ひさましてつ月の下

啖呵切りたる夏服の女

肩触りセクハラと言われ尻触る

築地市場はいつも混み合ふ

板前は殊勝に神棚拝みをり

何も返さず帰るゴルビー

たたいも追つても逃げぬ冬の蠅

窓に貼りつく枯葉一葉

寄り添へる想ひと想ひ燃ゆる頬

恋の終りは釣瓶落として

月の句のつくれぬままに不眠症

野分の町に野良犬の群

また一人企業戦士のそつと去り

同窓会は山笑ふ頃

父と子が花に埋もれて遊びけり

桜餅売る門前の茶屋

平成三年四月二十三日

於 電通会議室

新茶の香 鈴木 茂 捌

珍重の茶器に新茶の香りかな

耳を澄ませば郭公の声

ハイキング負ひしバッグも軽やかに

同じ服着てあれは双子か

世界には片割れ月の旗幾つ

手を握りしめ流す燈籠

わが恋はまだ青棗青瓢

そろそろお後のおよろしき頃

千代の富士男涙で土俵去り

ダイエツトが過ぎ骨粗鬆症

着飾りて成人の日の神詣で

狐の覗く襟巻の月

瑠璃堂にはほえみおはす彌勒仏

あれもこれもと願は いっぱい

寝化粧にほひ袋で肌おさへ

夢ぢやないわね抱いて頂戴

グレートバリアリーフの波白し

地酒で祝ふ鯛の浜焼

軟球を追ひかける子等花の下

風のまにまに揺るるふらここ

平成三年五月十六日

於 電通築地南寮

草合歎 佐古英子 捌

草合歎の小花いとしや畦の端

鶯雀の声の鈴をふるごと

セーラーで生徒代表勤むらん

箸もつ指の形いろいろ

大倉山多摩川越しに月を見る

ぐみの渋さと酸っぱさの恋

思ひ出は逆髪祭に漕ひし女

埃たっぷり古本の束

このたびは見知らぬ人の直木賞

ヴーヴクリコをお祝ひにする

還暦で子供はやつと七五三

すが洩りの家照らす月影

愛犬のベディキュア細くつややかに

舌を舐めたり牙を剥いたり

鳥さんも上原さんも不器用ね

ホテルの会話今日の出来事

虫垂炎ローマの夜に疼きだし

鯽を追って暮らす一生

楽人の手に花びらのたはむるる

黄金週間空のうららか

平成三年七月十七日

於 電通築地南寮

秀樹	英子
憲助	好敏
茂	明雅
碧	茂
助	碧
茂	敏
助	雅
碧	敏
助	子
碧	子
助	雅
碧	同
助	碧
茂	子
同	敏
樹	子
碧	雅
茂	碧
樹	茂
助	敏

◇卯の花連句会 二十韻 三卷

囀り 両吟

囀りの柏手に和す日和かな

雪解け水の落ちるつくばひ

蕨探り誘ひの便り受け取りて

リュックの紐を少し長めに

湯の宿の夜干の上に昇る月

祭笛聴く傷心のひと

いつはりの指輪はっしと打ちつけて

跳び乗る馬は鞍も着けずに

「太平記」ロケ見物の群がれる

三和土に縁の欠けし井

軋職をうべなふ友の頬被

川面の揺れを見つめ寒釣

抱かれて警女法悦の声哀し

渡す楳棹愛のひとこと

サイフォンで入れるコーヒー月淡く

救急車過ぐ秋深き町

学舎も再開弁の中にあり

記念写真に腰をかがめる

朱の盃に賜ふ一献花の舞

嬰のうとうと眠るのどかさ

於 西新宿三丁目「宿六」

雪解風 両吟

遠嶺の雲を生み出し雪解風

草摘む人の動く川土手

春ごたつ読みさしいくつ重ねて

ギターのソロをラジカセで聴く

夏の月浜の足あとみな海へ

塾の教師の聞く恋文

うつむけば罪の香りほのかなる

ソファーに座る猫の物憂げ

中年のファミコン狂ひマリオ餅

障子にびしり実南天撃つ

煤払尊き聖徒の裾も拭き

蠟栓固き秘蔵ブランドー

「ママ少し痩せたみたい」と口説く奴

天高く肥ゆ憧れの女

職立ついで湯の里に昼の月

気ままな旅は林檎かじりつ

子と孫に輜重兵てふ文字教へ

お国訛のいまだ直らざ

散り込める花に盪の鯉躍る

しばし眠らんおぼろなる鐘

於 杉並第三小

櫻の芽 両吟

雀らの声響きけり櫻の芽

走り回る子春の公園

団扇張る部屋の隙間に膳置きて

番組欄を先に広げる

修行僧月を斜に凍てし道

バナティーマイラールージュ引く女

フランス語寝物語で巧くなり

首脳会談政府忙し

杏脱の手垢付きたる皮鞆

独り渋茶をすする縁側

梅雨暗間ゴルフコンペの賑はひぬ

のそりのっそり臺の這ひいで

初見合身を硬くして向き合へり

不惑の忪惑ふ柔肌

静まりし湖上渡れる望の月

青磁の壺に活けし実柘榴

新築のマンションに入り今年酒

思ひ出すことなべてやさしき

満尾する俳諧の座に花の風

のどかに暮れし坂のある町

於 牛込北町

政治

健悟

志

悟

志

悟

志

悟

同

志

悟

志

悟

志

悟

志

悟

志

隆一

健悟

一

悟

一

悟

一

悟

同

一

悟

一

悟

一

悟

一

悟

一

健悟

守男

悟

男

悟

男

悟

男

同

悟

男

悟

男

悟

男

悟

男

悟

◇湘南連句教室

返り雨

蒲原志げ子 捌

青梅の転がる径や返り雨

志げ子

谷戸にくぐもる筒鳥の声

道子

パッチワーク端布選びのきりもなし

正子

皿にテラミス淹れるコーヒー

泰子

月高し管制塔の玻璃越しに

洋子

来るか来るかと待つは長き夜

道

ままかりで呷るやけ酒想ふ女

泰

いかもの喰ひと猫も笑ふか

正

宰相の跡目ねらひは水面下

道

島原大変肥後の協力

洋

降誕祭俄信者になりすまし

正

コールユープンゲン寒の月射す

志

チャツチャツチャツエアロピクスはハイレグで

泰

源氏講座は講師追かけ

道

夫何処涙ながらの加持祈禱

洋

除湿機好調部屋はからから

泰

紙芝居小銭しっかと握りしめ

正

爺と婆にも良きと悪しきと

志

故郷の駅舎は花に埋もれり

道

巣箱へ急ぐ蜜重き蜂

洋

平成三年六月二十一日
於 鎌倉 おうめ様

あぢさる

松田多恵子 捌

あぢさるのなほあでやかに雨の庭

多恵子

細桶のかげ生る蟻螂

文子

香手前文台に墨磨り終へて

和子

練切りが好き羊羹も好き

淑子

連れ立ちてセゾン劇場仰ぐ月

文

葉巻きの匂ひ口にうつして

和

敬老の無料定期で通う女

淑

地下の居酒屋呷る一杯

文

大統領二人かかへて赤い国

淑

達者な熊の多いサーカス

多

よどみなく咬阿切りつつ曆売り

和

高校生の二割中退

淑

カルチャーは白隠術でふ教室も

文

情念あつて乱拍子打つ

淑

身八つから浴衣ゆるめる月の宵

和

エレベーターを早く押すひと

文

年回忌昔語りに妻惚び

多

帰雁写せし入賞の作

文

昏れなつむ窓にうつすら花明り

淑

子をとろ子とる春も蘭

和

紅殻の門

本田八重子 捌

紅殻の門開かれて蟻の列

良子

雨に濡れゐるあぢさるの鞆

景翠

つれづれに手提袋に刺繡して

かず子

揺籠の児は深き眠りに

八重子

飛行機の乗降デッキ月皎々

景

秋扇持ち彼とオペラ座

か

焼栗のはせて嫉妬のむらむらと

八

島原大変火山爆発

良

猫轆かれ海岸通り人たかり

同

スケートボード渋滞のなし

か

縄のれんくぐりて酒ときりたんぼ

八

鼻座を守り仰ぐ寒月

か

赴任地の倅土産に異国妻

景

豊かな胸に隠すロケット

八

若き日は烈風すさぶ夢のごと

景

弊衣破帽で寮歌高吟

良

鳥居坂芋洗坂紀尾井坂

か

路面電車で陽炎の立つ

良

花守の寄せし花びらうつ高く

八

乗込み鮒をすくふ四手網

か

連句会案内

※ 連句教室

日時 第一日曜日 午後一時〜五時
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 三九四一〇一四五

※ 柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時〜五時
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マーケット下車)

※ A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時〜三時
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター
(電) 三三四四一〇九四一(代表)

※ 猫藪会(会員制)年四回

(二月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 江東芭蕉記念館

江東区常盤一六〇三
(電) 三六三一〇一四四八

雁帛往来

▽七月五日、千葉県国民文化祭の応募作品八百五十一篇到着、この日より早速審査にあたる。

▽七月七日、関口連句教室に出席。会者十六名、二席に分け正江捌・徒司捌にて歌仙二巻首尾。

▽七月十日、A・C・C、その前に秋元正江・式田和子両氏と相談、平成三年度、正式俳諧役割を決定。A・C・Cの済んだあと角川書店の滝沢・戸畑両氏と会谈。同社「俳文学大辞典」について説明を受く。
▽七月十二日、六時より銀座「卯波」にて、暉峻康隆・草間時彦・鈴木豊一・平井照敏・山田みづえ・中原道夫の諸氏と小宴。
▽七月十四日、柏連句会。三卓に分け、半歌仙三巻首尾。

▽七月十七日、深川芭蕉記念館において猫藪会、「新炭俵」「猫藪作品集I」の出版祝賀会を兼ね、出席五十一名。花束・お祝をいただき感激。あと十席に分け二十韻

十巻首尾。

▽七月十八日、電通連句部出席。二十韻一卷首尾。

▽七月二十三日、鴻巣市勝願寺にて、藤田寛海氏の葬儀に列席。六時より京王プラザにて佐藤和夫氏の著「海を越えた俳句」の出版記念会に出席。

▽七月二十四日、A・C・C、終ってB Rサーカスグループの副編集長河合卓司氏と逢い「連句の愉しさ」について話す。

季刊「連句」第三十四号

平成三年九月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方

電話 〇四七一(七五)一一九二
振替口座 東京七二五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版

B6判
三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

- 〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
- 〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鷗沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ、不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一七〇〇〇円

国語慣用句大辞典 B5 一八〇〇〇円

国語慣用句辞典 B5 一六〇〇〇円

国語史辞典 B5 一三〇〇〇円

日本語 語源辞典 B5 一八〇〇〇円

京都語辞典 B5 一八〇〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 一三〇〇〇円

隠語辞典 B5 一三〇〇〇円

近世上方語辞典 A5 一五〇〇〇円

花柳風俗語辞典 B6 一三〇〇〇円

大正新語俗語辞典 B6 一三〇〇〇円

難訓辞典 B5 一三〇〇〇円

名乗辞典 B6 一三〇〇〇円

名数数詞辞典 B6 一四〇〇〇円

あいさつ語辞典 B6 一四〇〇〇円

新版 こぼ遊び辞典 B6 一五〇〇〇円

類義語辞典 B6 一三〇〇〇円

表現類語辞典 B6 一四〇〇〇円

新版 文章表現辞典 B6 一四〇〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2